

平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金
(成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業(健やか次世代育成総合研究事業))
「健やかな親子関係を確立するためのプログラムの開発と有効性の評価に関する研究」

分担研究年度終了報告書

健やかな親子関係の確立に向けた
乳幼児健診の保健指導のあり方に関する検討
－健診従事者への研修とその効果 第 1 報－

分担研究者	山崎 嘉久	あいち小児保健医療総合センター
研究協力者	秋津 佐智恵	あいち小児保健医療総合センター保健センター保健室
	家入 香代	栃木県保健福祉部こども政策課
	山本 由美子	豊川保健所健康支援課
	加藤 直実	愛知県健康福祉部児童家庭課
	加藤 恵子	東海市市民福祉部健康推進課
	検校 規世	愛西市健康福祉部児童福祉課

【研究要旨】

乳幼児健康診査（以下、「乳幼児健診」）事業の問診場面で、健やかな親子関係の確立を目指すための相談支援方法を示すガイドブックを活用した研修を、乳幼児健診事業従事者に対して市町村・保健所単位で実施した。研修から数か月～半年間健診に従事した後のアンケート調査では、「感情的に叩いた」「感情的に怒鳴った」の訴えがあった時に「叩くこと・怒鳴ることはいけない」と伝える対応が研修前に比べ大きく増加したが、その割合は半数程度であった。研修後も、不適切な行為をやめるようはっきりと伝えることや「叩かない、怒鳴らない」子育てのための具体的な助言は、半数が困難と感じていた。その理由として、理解はできても対応に結び付いていない状況が推測できた。研修の到達目標別の達成度は、経験年数によって対応・理解の状況が大きく異なっていた。

今回の研修により、「叩かない子育て」の概念の普及に高い効果を認めたが、理解はできても対応できない従事者に対しては、経験年数ごとのステップに応じた到達目標を示した市町村の現任者への研修計画の実施とともに、ケースカンファレンス等による個々の事例を通じた経験の積み重ねが必要と考えられた。

健やかな親子関係の確立を目指すため、本分担研究班では、2017 年度に乳幼児健康診査（以下、「乳幼児健診」）における相談

支援のあり方について検討し、「健やかな親子関係の確立に向けた乳幼児健診現場における相談支援ガイドブック（試行版）」（以

下、「ガイドブック」とする。)を作成し、全国市町村の母子保健担当部局に配布した。その目的は、乳幼児健診の問診場面で「叩かない子育て」の概念に基づいた相談支援を行うことである。

本年度は、協力市町村において乳幼児健診に従事するスタッフに対し、ガイドブックを用いた研修を実施し、その効果について検討した。

A. 研究目的

乳幼児健診事業において、健やかな親子関係の確立に向けた支援につなげるためのガイドブックを用いた研修の実施とその効果を検討する。

B. 研究方法

乳幼児健診スタッフの研修前とその後のアンケート調査などを用いて、ガイドブックの活用方法ならびにその効果について検討する。研修は、次の2つの内容で実施した。

<研修方法1>

- ・「叩かない子育て」のコンセプト説明
- ・ガイドブック（試行版）のモデル事例を用いて、問診のポイントについて議論（全体討論又はグループ討論）
- ・対象市町村の事例について、問診のポイントの視点を用いて議論

対象市町村：福井県敦賀市、千葉県市原市、沖縄県本部町・今帰仁村、愛知県東海市、愛知

県豊川市の乳幼児健診従事者86名（保健師50名、助産師1名、看護師4名、その他：歯科衛生士、管理栄養士・栄養士保育士など31名）。

<研修方法2>

- ・「叩かない子育て」のコンセプト説明
- ・設定した事例を用いたグループワーク（GW）

GW1：論点の整理：「気になったこと」を書き出して討論

GW2：自分が面接者だったら、「どう考え、どのように行動するか」を書き出して討論
→設定した事例への対処方法を問診のポイントに沿って説明

GW3：学びの整理：事例からの学びを書き出して討論

対象市町村：北海道枝幸町他、栃木県小山市・周辺市町、栃木県北保健所管内市

表1. 研修受講者の職種・雇用形態・経験年数

職種	研修方法1		研修方法2		計	
保健師	50	58.1%	120	81.1%	170	72.6%
助産師	1	1.2%	13	8.8%	14	6.0%
看護師	4	4.7%	4	2.7%	8	3.4%
その他	31	36.0%	10	6.8%	41	17.5%
無記入	0	0.0%	1	0.7%	1	0.4%
合計	86	100.0%	148	100.0%	234	100.0%

雇用形態	研修方法1		研修方法2		計	
正規	47	54.7%	112	75.7%	159	67.9%
非正規	35	40.7%	31	20.9%	66	28.2%
無記入	4	4.7%	5	3.4%	9	3.8%
合計	86	100.0%	148	100.0%	234	100.0%

経験年数	研修方法1		研修方法2		計	
2年以内	17	19.8%	30	20.3%	47	20.1%
3～5年	16	18.6%	30	20.3%	46	19.7%
6～10年	21	24.4%	23	15.5%	44	18.8%
11～17年	8	9.3%	33	22.3%	41	17.5%
18年以上	16	18.6%	25	16.9%	41	17.5%
無記入	8	9.3%	7	4.7%	15	6.4%
合計	86	100.0%	148	100.0%	234	100.0%

町、千葉県船橋市の乳幼児健診従事者 148 名（保健師 120 名、助産師 13 名、看護師 4 名、その他：心理職、医師、家庭児童相談員、管理栄養士など 10 名）。

研修方法 1 と研修方法 2 とでは、職種ならびに正規・非正規の割合に違いを認めていた（表 1）。

<効果の検証>

研修受講者に対し、研修実施直前および研修後数か月程度に自記式アンケートを実施した。質問と選択肢を以下に示す。

（1）乳幼児健診等の場面で、「感情的に叩いた」との訴えがあった時の従事者の反応（択一回答）：1.「叩くことはいけない」とはっきりと伝える、2.「あざができるほど叩かないように」と助言をする、3.「叩くこともありますね」と子育ての大変さに共感する、4.子どもの様子は観察するが、特に助言はしない、5.その場面では対応はせず、要保護児童対策協議会や児童相談所等へ通告する、6.対応はしない、7.その他（自由記載）

（2）乳幼児健診等の場面で、「感情的な言葉で怒鳴った」との訴えがあった時の従事者の反応（択一回答）：1.「感情的に怒鳴ることはいけない」とはっきりと伝える、2.「脅えるほど怒鳴らないように」と助言をする、3.「怒鳴ることもありますね」と子育ての大変さに共感する、4.子どもの様子は観察するが、特に助言はしない、5.その場面では対応はせず、要保護児童対策協議会や児童相談所等へ通告する、6.対応はしない、7.その他（自由記載）

（3）乳幼児健診等の場面で、「感情的に叩いた」「感情的な言葉で怒鳴った」との訴え

がある時の対応で難しいと感じている項目（複数選択肢）：1.保護者の思いに共感した傾聴、2.「どのような場面、頻度」など具体的な二次質問を行うこと、3.保護者の感情や態度などの非言語的な観察、4.養育者の背景（病気や障害の有無、家族、支援者の有無等）に関する聞き取り、5.不適切な行為をやめるようはっきりと伝えること、6.「叩かない、怒鳴らない」子育てのための具体的な助言、7.継続的な支援の必要性の判断、8.保育園、子育て支援センターなど他機関との連携、9.支援終了の判断、10.困ることは特になし、11.その他（自由記載）

研修後アンケートには次の項目を加えた。

（4）研修が目指す目標（表 6）に対する達成度：1.研修受講により対応できるようになった、2.研修受講により必要性は理解できた、3.研修受講前から対応できていた、4.研修受講前から必要性の理解はできていた、5.対応も理解も難しい

（5）研修を参考として取り組んだ事例の経験：1.あるくその結果 a.うまくいった、b.うまくいかなかった、c.その他（自由記載）>、2.ない

（6）研修の感想や不適切な行動に対する保健指導についての意見：（自由記載）

（倫理面への配慮）

あいち小児保健医療総合センター倫理委員会の承認を得た。（承認番号 2018010）

C. 研究結果

研修前アンケートの記入は 234 人、研修後アンケートの記入は 182 人であった。

1) 乳幼児健診等の場面での対応

乳幼児健診等の場面で、「感情的に叩いた」との訴えがあった時の従事者の反応について、研修前は、「1.叩くことはいけない」が56人(23.9%)、「3.叩くこともありますね」が100人(42.7%)などであったが、研修後は、「1.叩くことはいけない」が104人(57.1%)、「3.叩くこともありますね」が38人(20.9%)などに変化した。「感情的に怒鳴った」に対する反応は、「1.怒鳴ることはいけない」が22人(9.4%)、「3.怒鳴ることもありますね」が138人(59.0%)などであったが、研修後は、「1.怒鳴ることはいけない」が61人(33.5%)、「3.怒鳴ることもありますね」が73人(40.1%)などであった。どちらの質問でも「6.対応しない」の回答は、研修前・研修後とも認めなかった(表2)。

なお、表2の選択肢のうち「7.その他」について、「感情的に叩いた」との訴えがあった時の反応では、研修前64人(27.4%)、研修後37人(20.3%)、「感情的に怒鳴った」との訴えがあった時の

表2. 「感情的に叩いた」との訴えがあった時の従事者の反応

	研修前		研修後	
	回答数	割合	回答数	割合
1.叩くことはいけない	56	23.9%	104	57.1%
2.あざができるほど叩かない	1	0.4%	1	0.5%
3.叩くこともありますね	100	42.7%	38	20.9%
4.観察のみで助言しない	8	3.4%	1	0.5%
5.要対協へ報告	1	0.4%	1	0.5%
6.対応しない	0	0.0%	0	0.0%
7.その他	64	27.4%	37	20.3%
無記入	4	1.7%	0	0.0%
計	234	100.0%	182	100.0%

「感情的に怒鳴った」との訴えがあった時の従事者の反応

	研修前		研修後	
	回答数	割合	回答数	割合
1.怒鳴ることはいけない	22	9.4%	61	33.5%
2.脅えるほど怒鳴らない	8	3.4%	4	2.2%
3.怒鳴ることもありますね	138	59.0%	73	40.1%
4.観察のみで助言しない	4	1.7%	2	1.1%
5.要対協へ報告	0	0.0%	1	0.5%
6.対応しない	0	0.0%	0	0.0%
7.その他	58	24.8%	39	21.4%
無記入	4	1.7%	2	1.1%
計	234	100.0%	182	100.0%

反応では、研修前58人(24.8%)、研修後39人(21.4%)と無視できない程度の該当数が認められた。このため、その他に記述された自由記載について第2報で分析した。

研修前後で変化が大きかった「1.叩くこと

表3. 職種別の変化

職種	研修前			研修後		
	回答数	叩くことはいけない	割合	回答数	叩くことはいけない	割合
保健師	167	42	25.1%	133	77	57.9%
助産師	14	4	28.6%	10	5	50.0%
看護師	8	1	12.5%	7	4	57.1%
その他	41	9	22.0%	32	18	56.3%
計	230	56	24.3%	182	104	57.1%

職種	研修前			研修後		
	回答数	叩くこともありますね	割合	回答数	叩くこともありますね	割合
保健師	167	69	41.3%	133	29	21.8%
助産師	14	7	50.0%	10	3	30.0%
看護師	8	4	50.0%	7	1	14.3%
その他	41	20	48.8%	32	5	15.6%
計	230	100	43.5%	182	38	20.9%

はいけない」と「3.叩くこともありますね」、「1.怒鳴ることはいけない」と「3.怒鳴ることもありますね」について職種別に集計しても、保健師、助産師、看護師について前者が増加し、後者が減少を認めた（表3）。

表4. 経験年数別の変化

経験年数	研修前			研修後		
	回答数	叩くことはいけない		回答数	叩くことはいけない	
2年以内	47	7	14.9%	36	16	44.4%
3～5年	46	15	32.6%	34	24	70.6%
6～10年	44	13	29.5%	37	20	54.1%
11～17年	40	12	30.0%	31	19	61.3%
18年以上	39	8	20.5%	34	19	55.9%
計	216	55	25.5%	172	98	57.0%

経験年数	研修前			研修後		
	回答数	叩くこともありますね		回答数	叩くこともありますね	
2年以内	47	23	48.9%	36	12	33.3%
3～5年	46	18	39.1%	34	4	11.8%
6～10年	44	20	45.5%	37	9	24.3%
11～17年	40	14	35.0%	31	5	16.1%
18年以上	39	18	46.2%	34	7	20.6%
計	216	93	43.1%	172	37	21.5%

一方、経験年数別の集計では、「1.叩くことはいけない」の回答が、経験年数3～5年では研修前が32.6%であったところが研修後に70.6%と最も多い割合となり、2年以内では研修前に14.9%であったのが研修後も44.4%と最も低い割合であった。「1.怒鳴ることはいけない」については、経験年数18年以上が、研修前12.8%・研修後39.4%と研修後の回答割合が最も多く、6～10年が研修前9.1%・研修後25.0%ともっとも少ない割合であった（表4）。

2) 対応で難しいと感じている項目

乳幼児健診等の場面で、「感情的に叩いた」「感情的な言葉で怒鳴った」との訴えがある時の対応が困難と感じている項目の中では、「5.不適切な行為をやめるようはっきりと伝えること」と「6.「叩かない、怒鳴らない」子育てのための具体的な助言」が研修前それぞれ51.8%と53.1%と最も多く、研修後も53.3%と52.2%と半数以上が困難

と感じていた。選択肢のうち研修前後で5%以上減少した項目は、「7.継続的な支援の必要性の判断」（39.9%から33.0%）、「8.保育園、子育て支援センターなど他機関との連携」（14.9%から9.3%）であり、5%以上増加したのは、「9.支援終了の判断」（32.9%から37.9%）であった（表5）。

困難と感じる割合が5%以上変化した項目を、職種別に集計すると、保健師については「4.養育者の背景に関する聞き取り」、「7.継続的な支援の必要性の判断」、「8.保育園、子育て支援センターなど他機関との連携」が減少し、「9.支援終了の判断」は増加を認めた。保健師・助産師・看護師以外のその他職種でも同じ項目が増減した。助産師と看護師は回答数が少なく分析から除外した。また、経験年数別に集計すると、経験年数2年以内では、「1.保護者の思いに共感した傾聴」、「6.「叩かない、怒鳴らない」子育てのための具体的な助言」、「7.継続的な支援の必要性の判断」が減少、「4.養育者の背景に関する聞き取り」、「9.支援終了の判断

表 5. 「感情的に叩いた」「感情的な言葉で怒鳴った」との訴えがある時の対応が困難と感じている項目

困難と感じている項目	研修前			研修後		
	回答数	該当数	該当率	回答数	該当数	該当率
1.保護者の思いに共感した傾聴	228	26	11.4%	182	16	8.8%
2.具体的な二次質問を行うこと	228	43	18.9%	182	30	16.5%
3.保護者の感情や態度などの非言語的な観察	228	38	16.7%	182	31	17.0%
4.養育者の背景に関する聞き取り	228	79	34.6%	182	59	32.4%
5.不適切な行為をやめるようはっきりと伝えること	228	118	51.8%	182	97	53.3%
6.「叩かない、怒鳴らない」子育てのための具体的な助言	228	121	53.1%	182	95	52.2%
7.継続的な支援の必要性の判断	228	91	39.9%	182	60	33.0%
8.保育園、子育て支援センターなど他機関との連携	228	34	14.9%	182	17	9.3%
9.支援終了の判断	228	75	32.9%	182	69	37.9%
10.困ることは特にない	228	1	0.4%	182	6	3.3%

」が増加した。18年以上では、「6.「叩かない、怒鳴らない」子育てのための具体的な助言」、「7.継続的な支援の必要性の判断」、「8.保育園、子育て支援センターなど他機関との連携」、「9.支援終了の判断」が減少、「10.困ることは特にない」が増加した。「5.不適切な行為をやめるようはっきりと伝えること」は39.5%から47.1%に増加を認めしたが、研修後の全体の平均値53.1%より低値であった。

3) 到達目標の到達度

研修に当たって設定した12項目の到達目標の達成度を表6に示す。

「1.研修受講により対応できるようになった」と「3.研修受講前から対応できていた」を加えた割合が50%を超えたのは、「1.保護者が発したSOSに応え、しっかりと向き合うことができる」、「4.保護者が色々な話しができるよう、適切な質問をすることができる」、「5.保護者が発する「気になる雰

囲気」を感じたり、観察したりすることができる」、「6.質問の回答や雰囲気等から、深層的原因や、重症度を推測することができる」であった。一方、「1.研修受講により対応できるようになった」の割合が、「3.研修受講前から対応できていた」の割合を超えた目標は、「2.“思い”と“行為”を分けて聴くことができる」、「4.保護者が色々な話しができるよう、適切な質問をすることができる」、「6.質問の回答や雰囲気等から、深層的原因や、重症度を推測することができる」、「7.解決方法を一緒に検討し、具体的に伝えることができる」、「8.“不適切な行為”をはっきり止めることができる」、「10.面接者の価値観に左右されず、事実を正しく把握することができる」、「12.SOSを発しない「気になる」事例にアプローチすることができる」であり、これらの多くは、両方で50%未満の達成状況であった。

「5 対応も理解も難しい」の回答割合は、「1.保護者が発したSOSに応え、しっかりと向き合うことができる」では0%と該当が認められず、「12.SOSを発しない「気になる」事例にアプローチすることができる」では12.4%と最も該当割合が高かった。研修目標の達成度を職種別に分析すると、

「7.解決方法を一緒に検討し、具体的に伝えることができる」、「9.地域の支援に係る資源を把握し、適切な支援を提供することができる」、「11.他の機関の役割を理解した上で連携し、支援の幅を広げることができる」、「12.SOSを発しない「気になる」事例にアプローチすることができる」の達成度において有意差を認めた。いずれの目標においても保健師、助産師、「3.研修受講前から対応できていた」、「4.研修受講前から必要性の理解はできていた」の割合が高く、看護師は、「2.研修受講により必要性は理解できた」が多かった。その他の職種は「3.研修受講前から対応できていた」、「4.研修受講前から必要性の理解はできていた」の割合が多いが、「5.対応も理解も難しい」の回答が多く認められた(図1)。

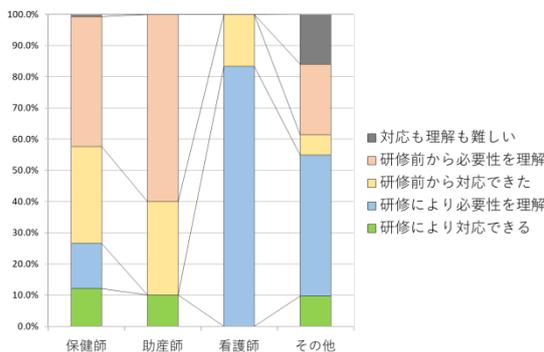


図1. 研修目標9に対する職種別の達成度

経験年数についての分析では、8項目で有意差を認めた。その特徴を記述する。

「2. “思い” と “行為” を分けて聴くことができる」では、3～5年群では、研修より対応または理解できたのと回答が100%となるなど、どの経験年数の群でも研修により対応や理解できるようになった割合が、研修前から対応や理解していた割合よりも多かった(図2)。

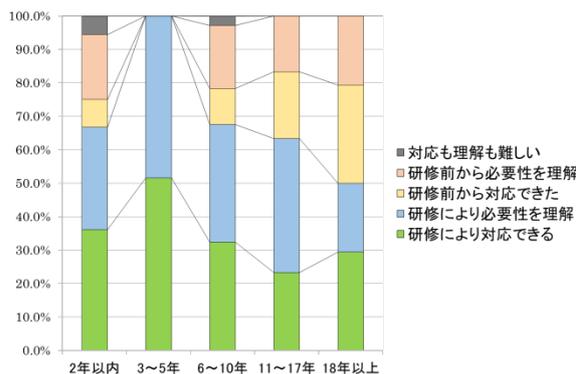


図2. 研修目標2に対する経験年数別の達成度

「8. “不適切な行為” をはっきり止めることができる」では、11～17年以外は研修により対応や理解できるようになった割合が多く、この2項目では、研修の効果が明確であった(図3)。

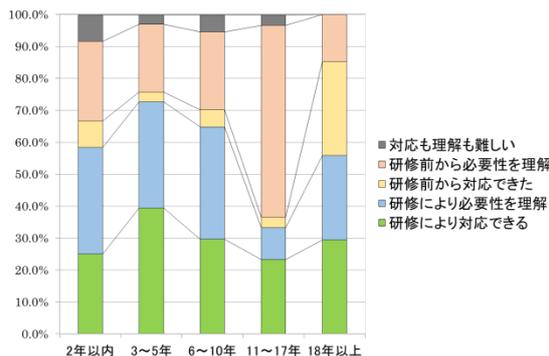


図3. 研修目標8に対する経験年数別の達成度

「5.保護者が発する「気になる雰囲気」を感じたり、観察したりすることができる」、「(図5)、「9.地域の支援に係る資源を把握し、適切な支援を提供することができる」(図6)、

及び「11.他の機関の役割を理解した上で連携し、支援の幅を広げることができる」(図7)では、いずれも経験年数が短い群の研修により対応や理解できるようになった割合

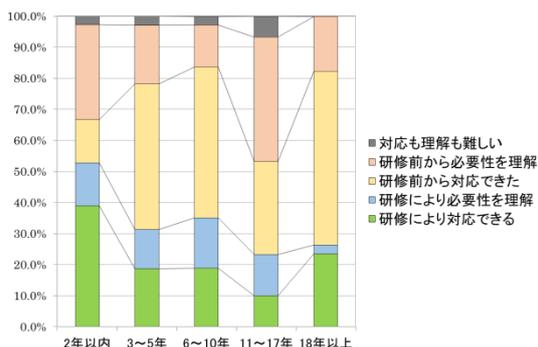


図5.研修目標5に対する経験年数別の達成度

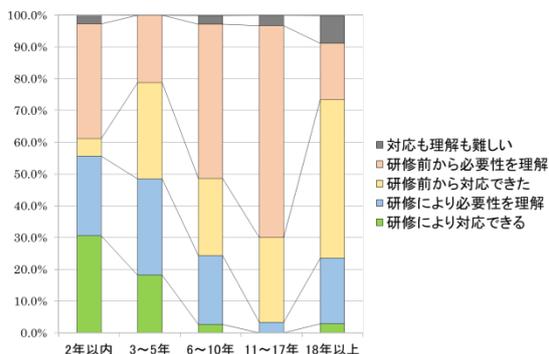


図6.研修目標9に対する経験年数別の達成度

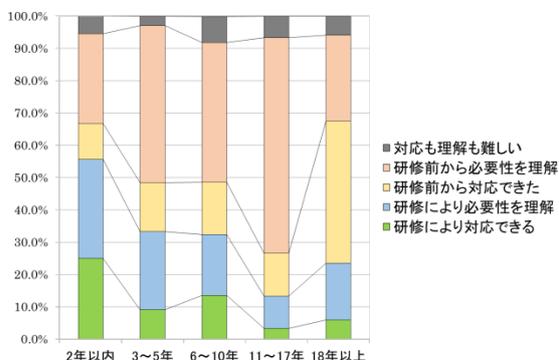


図7.研修目標11に対する経験年数別の達成度

が多く、これ以降は、経験年齢の順に研修により対応や理解ができる割合が減り、研修前から対応や理解ができた割合が増加していた。

「12.SOSを発しない「気になる」事例にアプローチすることができる」でも、同様に研修により対応や理解できるようになった割合は経験年数とともに減少したが、経験年数が17年以上でも半数程度が研修により対応や理解できるようになったと回答したが、一方で、どの経験年数の群でも対応も理解も難しいとの回答が10%程度認められた(図4)。

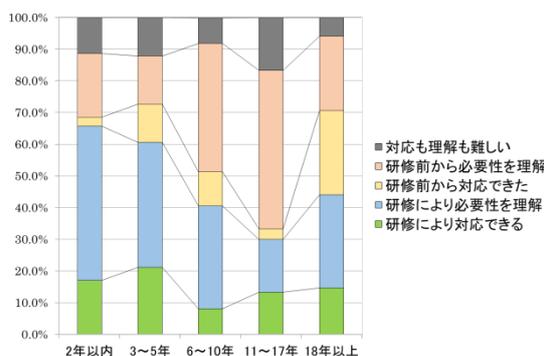


図4.研修目標12に対する経験年数別の達成度

「7.解決方法を一緒に検討し、具体的に伝えることができる」では、6~10年目までは研修により対応や理解できるようになった割合が多く、これ以降は研修前から対応や理解ができていた割合が多かった(図8)。

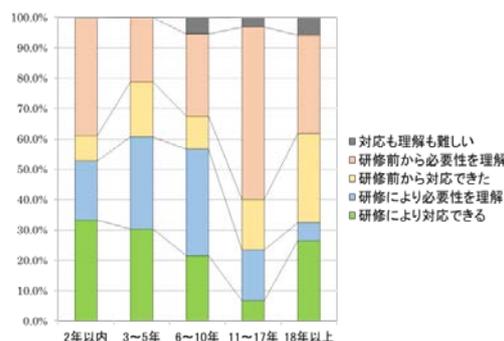


図8.研修目標7に対する経験年数別の達成度

「1.保護者が発したSOSに応え、しっかりと向き合うことができる」では、経験年数により差異は認めるがどの経験年数でも研修前から対応や理解できた割合が多かった。この目標のみ対応も理解も難しいを認めなかった(図9)。

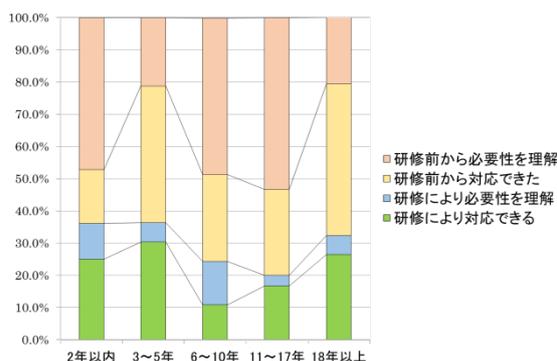


図9.研修目標1に対する経験年数別の達成度

D. 考察

現在、「健やか親子21(第2次)」の一環として乳幼児健診で全国共通の問診項目が活用されている。その一つとして「この数か月の間に、ご家庭で以下のことができましたか。あてはまるものすべてに○を付けて下さい。」の設問で、「1.しつけのし過ぎがあった」、「2.感情的に叩いた」、「3.乳幼児だけを家に残して外出した」、「4.長時間食事を与えなかった」、「5.感情的な言葉で怒鳴った」、「6.子どもの口をふさいだ」、「7.子どもを激しく揺さぶった」、「8.いずれにも該当しない」(3~4か月児健診と1歳6か月児健診は1~8の選択肢、3歳児健診は1~5と8の選択肢)を用いた問診が行われている。

母子保健課の全国調査(2017年度)では、「感情的に叩いた」の該当割合は、3~4か月児で8,159人(1.2%)、1歳6か月児で38,110人(5.2%)、3歳児で71,933人

(10.6%)、「感情的な言葉で怒鳴った」は、3~4か月児37,528人(5.5%)、1歳6か月児124,140人(17.0%)、3歳児262,411人(38.8%)と、乳児から幼児期の子どもを育てる親が、日常の子育ての中で「感情的に叩く」、「感情的な言葉で怒鳴る」行為は、子どもの年齢とともに増加する。問診場面では、該当割合が比較的多いことやこの選択肢の該当者の多くは虐待行為をしているわけではないと推定されることなどから、「叩くこともありますね」、「怒鳴ることもありますね」と子育ての大変さに共感するまでで対応が終わっている状況が、今回の研修前アンケートからも窺われた。

一方、「子どもの口をふさいだ」では3~4か月児4,218人(0.6%)、1歳6か月児4,011人(0.5%)、「子どもを激しく揺さぶった」では3~4か月児6,422人(0.9%)、1歳6か月児11,897人(1.6%)と比較的少数とはいえ該当者があり、多くの場合、明らかなSOSのサインと捉えて相談支援を行う必要がある。

健やかな親子関係の確立を目指すこの研究班の目的は、「口ふさぎ」や「揺さぶり」のみではなく、感情的に叩く・怒鳴る行為をはっきりと止めることである。昨年度作成した相談支援ガイドブックと今年度実施した研修においては、乳幼児健診の問診場面での対応に焦点を当て、健診従事者の対応を変えることを目指した。

研修から数か月~半年間健診に従事した後のアンケート調査では、「感情的に叩いた」「感情的に怒鳴った」の訴えがあった時に「叩くこと・怒鳴ることはいけない」と伝える対応が、研修前に比べ大きく増加した。

表 7. 不適切な行為をやめるよう伝えることを困難と感じる人の達成度 (p=0.0000)

困難に感ずる項目 「5.不適切な行為をやめるようはっきりと伝えること」	「8. “不適切な行為”をはっきり止めることができる」の達成度					
	1.研修受講により対応できるようになった	2.研修受講により必要性は理解できた	3.研修受講前から対応できていた	4.研修受講前から必要性の理解はできていた	5.対応も理解も難しい	計
該当	19 19.6%	39 40.2%	1 1.0%	33 34.0%	5 5.2%	97 100.0%
非該当	32 39.0%	12 14.6%	16 19.5%	20 24.4%	2 2.4%	82 100.0%

この意味では研修はある程度の効果を上げたと言える。

一方、不適切な行為をやめるようはっきりと伝えることや叩かない、怒鳴らない子育てのための具体的な助言については、研修後も半数が困難と感じていた。「5.不適切な行為をやめるようはっきりと伝えること」を困難と感じている人の達成度との関係进行分析すると、「8. “不適切な行為”をはっきり止めることができる」の達成度のうち、困難と感じている人は、「2.研修受講により必要性は理解できた」、「4.研修受講前から必要性の理解はできていた」との回答が有意に多く認められた(表7)。また、「6.質問の回答や雰囲気等から、深層的な原因や、重症度を推測することができる」(p=0.021)、「7.解決方法を一緒に検討し、具体的に伝えることができる」(p=0.013)の達成度も同様に理解ができている割合が対応できている割合よりも多かったことから、困難と感じる理由が、理解はできても対応に結び付いていないことが原因と推測できた。

研修の到達目標別の達成度では、すべての目標で9割以上が、対応または理解ができたと回答したが、経験年齢別の達成度は、研修目標により対応・理解の状況が大きく異なっていた。

「2. “思い”と“行為”を分けて聴くことができる」と「8. “不適切な行為”をはっきり止めることができる」の目標は、研修により対応・理解ができたとの回答がほとんどの経験年齢群で半数以上を占めた。このことは研修の直接的な効果であるとともに、経験年数に関わらず研修前の現場対応であり意識されてなかった目標であるとも考えられた。

「5.保護者が発する「気になる雰囲気」を感じたり、観察したりすることができる」、「9.地域の支援に係る資源を把握し、適切な支援を提供することができる」、「11.他の機関の役割を理解した上で連携し、支援の幅を広げることができる」と、「12.SOSを発しない「気になる」事例にアプローチすることができる」の目標は、いずれも経験年数の短い群で研修により対応や理解ができる割合が高く、経験年齢の順に研修により対応や理解ができる割合が減り、研修前から対応や理解ができた割合が増加した。特に「12.SOSを発しない「気になる」事例にアプローチすることができる」は、対応も理解もできない割合が他の目標に比べて目立っており、相当の経験が必要な目標であるとも考えられた。つまり、これらの

目標は、現場経験の長さが達成度に影響する目標と考えられた。

「7.解決方法を一緒に検討し、具体的に伝えることができる」も経験年数とともに研修により対応・理解ができる割合が変化したが、6～10年目までは研修前に対応・理解できていた割合が少なく、他の項目よりも経験年数を要する目標であると考えられた。

「1.保護者が発したSOSに応え、しっかりと向き合うことができる」では、どの経験年数でも研修前から対応や理解できた割合が多く、経験年数が短い場合でも相談援助の基本としてすでに身につけている従事者が比較的多い目標と考えられた。

このように、到達目標の達成度が、経験年齢で異なることは、従事者に研修を企画する場合に、乳幼児健診の従事経験のステップを留意する必要があることが示唆されるとともに、今回用いた達成目標は、乳幼児健診の問診場面での相談支援を行うための到達目標として一般化できる可能性があると考えられた。理解はできても対応できない従事者に対しては、経験年数ごとのステップに応じた到達目標を示した市町村の現任者への研修計画の実施とともに、ケースカンファレンス等による個々の事例を通じた経験の積み重ねが必要と考えられた。

研修方法2のプログラムを受講した市町村の担当者からは、「研修後、全員の保健師に復命研修を行うとともに、今年度の乳幼児健診全てを確認し、特定項目に「はい」と回答した問診票を抽出し、地区担当の保健師に配付して、家庭訪問や面接を行うなど状況を把握した。」や、「研修会を実施した後は、乳幼児健診のカンファレンスが変

化し、従事者の士気が高まり非常に活発になった」との体験談が得られたことや、「研修会直後の乳幼児健診のカンファレンスから従事者の意識が大きくかわり、前向きな支援について考える視点が共有できて、具体的な支援方法が検討されている。」などの波及効果が把握されている。

なお、今回の健診従事者に対するアンケート結果はプロセス評価である。本研究では、半数程度の市町村において、研修前後に乳幼児健診を受診した親の問診結果の縦断分析を実施している。今後、アウトカムである住民の行動変化について分析を予定している。

E. 結論

今回の研修により、「叩かない子育て」の概念の普及に高い効果を認めた。一方、理解はできても対応できない従事者に対しては、経験年数ごとのステップに応じた到達目標を示した市町村の現任者への研修計画の実施とともに、ケースカンファレンス等による個々の事例を通じた経験の積み重ねが必要と考えられた。

F. 健康危険情報

該当なし

G. 研究発表

1. 論文発表

1. 山崎嘉久：乳幼児健診の現状と課題。こどもと家族のケア 2018：12(6)：56-59
2. 山崎嘉久：「健やか親子21(第2次)」における乳幼児健診の意義。小児内科 2018：50(6)：890-895

3. 山崎嘉久：乳幼児健診で健やかな親子を支援する．小児科 2019：66(2)：191-197

2. 学会発表

1. 山崎嘉久：乳幼児健康診査事業に対する数値評価について．第76回日本公衆衛生学会総会シンポジウム9 健やかな親子とは：健やか親子21（第2次）の重点課題戦略と「愛の鞭ゼロ作戦」鹿児島市、2017年10月

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む。）

1. 特許取得：なし
2. 実用新案登録：なし
3. その他：なし

I. 問題点と利点

特記すべきことなし

J. 今後の展開

本年度の研修の結果を踏まえて、次年度は試行版のガイドブックを改訂し、市町村の現任者研修プログラムとともに提供することを予定している。

平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金
(成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業(健やか次世代育成総合研究事業))
「健やかな親子関係を確立するためのプログラムの開発と有効性の評価に関する研究」

分担研究年度終了報告書

健やかな親子関係の確立に向けた
乳幼児健診の保健指導のあり方に関する検討
－健診従事者への研修とその効果 第2報－

分担研究者	山崎 嘉久	あいち小児保健医療総合センター
研究協力者	秋津 佐智恵	あいち小児保健医療総合センター保健センター保健室
	家入 香代	栃木県保健福祉部こども政策課
	山本 由美子	豊川保健所健康支援課
	加藤 直実	愛知県健康福祉部児童家庭課
	加藤 恵子	東海市市民福祉部健康推進課
	検校 規世	愛西市健康福祉部児童福祉課

【研究要旨】

乳幼児健康診査（以下、「乳幼児健診」）事業の問診場面で、健やかな親子関係の確立を目指すための相談支援方法を示すガイドブックを活用した研修を、乳幼児健診事業従事者に対して市町村単位で実施した。研修から数か月～半年間健診に従事した後のアンケート調査では、「感情的に叩いた」「感情的に怒鳴った」の訴えがあった時に「叩くこと・怒鳴ることはいけない」と伝える対応が研修前に比べ大きく増加したが、その割合は半数程度であった。対応について「その他」を選択し自由記載をした人が多かったことからその内容を分析したところ、自由記載の中で、「状況確認や共感をしながらも叩くことや怒鳴ることはいけないと伝える」と回答した人が増加していた。しかし、「叩くこと」と「怒鳴る」ことを比較した場合、「怒鳴ること」の行為についていけないと伝えると回答した人が少なかったことから「怒鳴ること」が不適切な養育であり、それをとめるための支援が必要であることを健診従事者に伝えていくことが必要であると考えられた。

健やかな親子関係の確立を目指すため、本分担研究班では、2017年度に乳幼児健康診査（以下、「乳幼児健診」）における相談支援のあり方について検討し、「健やかな親子関係の確立に向けた乳幼児健診現場における相談支援ガイドブック（試行版）」（以下、「ガイドブック」とする。）を作成し、全国市町村の母子保健担当部局に配布した。

その目的は、乳幼児健診の問診場面で「叩かない子育て」の概念に基づいた相談支援を行うことである。

本年度は、協力市町村において乳幼児健診に従事するスタッフに対し、ガイドブックを用いた研修を実施し、その効果について検討した。

A. 研究目的

乳幼児健診事業において、健やかな親子関係の確立に向けた支援につなげるためのガイドブックを用いた研修の効果について検討するため、回答の自由記載について分析する。

B. 研究方法

研修受講者に対し、研修実施直前および研修後数か月程度に自記式アンケートを実施した。アンケート項目のうち（１）乳幼児健診等の場面で、「感情的に叩いた」との訴えがあった時の従事者の反応（択一回答）、及び（２）乳幼児健診等の場面で、「感情的な言葉で怒鳴った」との訴えがあった時の従事者の反応（択一回答）の設問で、「7.その他（自由記載）」に回答した自由記載の内容について、研修会の前後の変化を比較した。なお、研修会の実施方法については、健やかな親子関係の確立に向けた乳幼児健診の保健指導のあり方に関する検討～健診従事者への研修とその効果 第1報～に示した。

C. 研究結果

研修前アンケートの記入は234人、研修後アンケートの記入は182人であった。

（１）乳幼児健診等の場面での対応

乳幼児健診等の場面で、「感情的に叩いた」との訴えがあった時の従事者の反応について、研修前は、「1.叩くことはいけない」が56人（23.9%）、「3.叩くこともありますね」が100人（42.7%）などであったが、研修後は、「1.叩くことはいけない」が104人（57.1%）、「3.叩くこともありますね」が38人（20.9%）などに変化した。「感情

的に怒鳴った」に対する反応は、「1.怒鳴ることはいけない」が22人（9.4%）、「3.怒鳴ることもありますね」が138人（59.0%）などであったが、研修後は、「1.怒鳴ることはいけない」が61人（33.5%）、「3.怒鳴ることもありますね」が73人（40.1%）などであった。どちらの質問でも「6.対応しない」の回答は、研修前・研修後とも認めなかった（表1）。

なお、表1の選択肢のうち「7.その他」について、「感情的に叩いた」との訴えがあった時の反応では、研修前64人（27.4%）、研修後37人（20.3%）、「感情的に怒鳴った」との訴えがあった時の反応では、研修前58人（24.8%）、研修後39人（21.4%）と無視できない程度の該当数が認められた。このため、その他に記述された自由記載について職種や経験年数等から研修前後のアンケ

表1. 「感情的に叩いた」との訴えがあった時の従事者の反応

	研修前		研修後	
	人数	割合	人数	割合
1.叩くことはいけない	56	23.9%	104	57.1%
2.あざができるほど叩かない	1	0.4%	1	0.5%
3.叩くこともありますね	100	42.7%	38	20.9%
4.観察のみで助言しない	8	3.4%	1	0.5%
5.要対協へ報告	1	0.4%	1	0.5%
6.対応しない	0	0.0%	0	0.0%
7.その他	64	27.4%	37	20.3%
無記入	4	1.7%	0	0.0%
計	234	100.0%	182	100.0%

「感情的に怒鳴った」との訴えがあった時の従事者の反応

	研修前		研修後	
	人数	割合	人数	割合
1.怒鳴ることはいけない	22	9.4%	61	33.5%
2.脅えるほど怒鳴らない	8	3.4%	4	2.2%
3.怒鳴ることもありますね	138	59.0%	73	40.1%
4.その他	8	3.4%	3	1.7%

表2 対象者の職種・雇用形態・経験年数

職種	分析対象者		回答者全体	
	人数	割合	人数	割合
保健師	61	64.2%	170	72.6%
助産師	3	3.2%	14	6.0%
看護師	4	4.2%	8	3.4%
その他	27	28.4%	41	17.5%
無記入	0	0.0%	1	0.4%

雇用形態	分析対象者		回答者全体	
	人数	割合	人数	割合
正規	62	65.3%	159	67.9%
非正規	32	33.7%	66	28.2%
無記入	1	1.0%	9	3.8%
合計	95	100.0%	234	100.0%

経験年数	分析対象者		回答者全体	
	人数	割合	人数	割合
2年以内	30	31.6%	47	20.1%
3～5年	12	12.6%	46	19.7%
6～10年	25	26.3%	44	18.8%
11～17年	8	8.4%	41	17.5%
18年以上	17	17.9%	41	17.5%
無記入	3	3.2%	15	6.4%
合計	95	100.0%	234	100.0%

一トの比較ができた95人について分析した。

分析対象となった95人の職種、雇用形態と経験年数を回答者全体と比較した。分析対象者の職種は、「その他」が多く、保健師、助産師は少ない傾向であった。雇用形態は非正規が多かった。経験年数は、2年以内と6～10年が多き傾向を認めた(表2)。

また、分析対象者は研修前後のどちらかで「7.その他」の回答者であるため、別の選択肢を選ぶ場合もある。回答状況の変化を表3に示した。

1)「感情的に叩いた」との訴えがあった時の従事者の反応の変化(表4)

研修前アンケートで「7.その他」を選択した者は34人で、職種は保健師が25人、助産師、看護師、栄養士、保育士がそれぞれ2人、歯科衛生士が

1人だった。経験年数は、2年以内が8人、3～5年が6人、6～10年が9人、11年～15年が2人、16年以上が9人だった。

研修前アンケートの自由記載の内容については、多少の表現の違いはあるが、最も近い対応として「状況確認」が9人、「共感し状況確認(共感か状況確認どちらか一方のみも含む)したうえで、支援する」が9人、「共感し状況確認(共感か状況確認どちらか一方のみも含む)したうえで、叩くことはいけない

と伝える」が6人、「共感」が4人、「共感し、状況確認」が2人、いずれにも分類できないものが4人だった。

研修後アンケートでは、選択肢1の「叩くことはいけないと伝える」が11人、選択肢3の「子育ての大変さを共感する」が4人で、選択肢7の「その他」が18人だった。

選択肢7「その他」と回答した18人の自

表3.「感情的に叩いた」との訴えがあった時の従事者の反応

	研修前		研修後	
	人数	割合	人数	割合
1.叩くことはいけない	3	3.2%	45	47.4%
2.あざができるほど叩かない	5	5.2%	0	0.0%
3.叩くこともありますね	53	55.8%	22	23.2%
4.観察のみで助言しない	4	4.2%	1	1.1%
5.要対協へ報告	0	0.0%	1	1.1%
6.対応しない	0	0.0%	0	0.0%
7.その他	30	31.6%	26	27.4%
無記入	0	0.0%	0	0.0%
計	95	100.0%	95	100.0%

「感情的に怒鳴った」との訴えがあった時の従事者の反応

	研修前		研修後	
	人数	割合	人数	割合
1.怒鳴ることはいけない	10	10.5%	21	22.1%
2.脅えるほど怒鳴らない	1	1.1%	3	3.2%
3.怒鳴ることもありますね	45	47.4%	38	40.0%
4.観察のみで助言しない	4	4.2%	2	2.0%
5.要対協へ報告	0	0.0%	1	0.5%
6.対応しない	0	0.0%	0	0.0%
7.その他	34	35.7%	29	30.5%
無記入	34	35.7%	1	1.1%
計	95	100.0%	95	100.0%

由記載の内容は、「状況確認、共感などの対応とともに『叩いてはいけないと伝える』『叩くことの悪影響を伝える』など叩く行為について指導する」と回答した者が12人みられた。研修前アンケートで最も多かった「状況確認」のみの対応は1人であった。

研修前アンケートから「共感や状況確認などをしたうえで、叩く行為についていけないと伝える」と答えていた6人のうち、4人は選択肢1.「叩くことはいけない」を回答し、1人は「共感するが、叩くことは指導し支援につなげる」、1人は選択肢3.「子育ての大変さに共感する」と回答した。

研修前後で回答に変化がなかった者は、「状況確認をし、カンファレンスで共有」「状況確認」の2人だった。

2)「感情的に怒鳴った」との訴えがあった時の従事者の反応の変化(表5)

研修前に「その他」を選択した者は30人で、職種は保健師が22人、助産師、看護師、保育士がそれぞれ2人、栄養士、歯科衛生士がそれぞれ1人だった。経験年数は、2年以内が6人、3～5年が5人、6～10年が7人、11年～17年が3名、18年以上が8名、不明が1名であった。

研修前アンケートの自由記載の内容については、多少の表現の違いはあるが、最も近い対応として「共感し状況確認(共感か状況確認どちらか一方のみも含む)したうえで、支援する」が11人、「状況確認」が10人、「共感し、状況確認」が4人、「共感」が3人、「共感し状況確認(共感か状況確認どちらか一方のみも含む)したうえで、怒鳴ることはいけないと伝える」が2人だった。

研修後アンケートでは、選択肢1.の「怒鳴ることはいけないと伝える」と選択肢2.の「脅えるほど怒鳴らないようにと助言する」が2人、選択肢3.の「子育ての大変さを共感する」が6人で、選択肢7.の「その他」が19人だった。

選択肢7.「その他」と回答した19人の自由記載の内容は、「状況確認、共感などの対応とともに『怒鳴ることはいけないと伝える』『怒鳴ることの悪影響を伝える』など怒鳴る行為について指導する」と回答した者が8人みられた。

研修前アンケートから「共感や状況確認などをしたうえで、怒鳴る行為についていけないと伝える」と答えていた2人のうち、1人は選択肢1.「叩くことはいけない」を回答し、1人は選択肢2.「脅えるほど怒鳴らないようにと助言する」と回答した。研修前後で回答に変化がなかった者は、「状況確認」が3人、「共感し支援する」の1人だった。

「叩くこと」に比べ、「怒鳴ること」では、研修後のアンケートで不適切な行為について指導すると回答した者は少なかった。

D. 考察

研修では、「叩かない」「怒鳴らない」など不適切な子育てをなくすため、不適切な行為について共感しすぎたり、曖昧にしたりせず、「思い」と「行為」を分けて聞き、「思い」には共感するが、不適切な行為ははっきりと止めたうえで、具体的な支援をすることを伝えている。

研修前アンケートでは「状況確認」「共感」などの回答が多くみられたが、研修後アンケートでは、「不適切な行為をやめるよう伝

える」と回答した者が増えたことから研修の企画者側の目標が理解されたと思われた。

しかし、「叩くこと」と「怒鳴ること」を研修前後のアンケートで比べた場合、「叩くこと」より「怒鳴ること」の行為についてやめるよう伝えるとの回答が少ない傾向がみられたことから、健診従事者の「叩くことはいけない」が「怒鳴るくらいなら」という価値観が健診従事者にあることが分かった。「叩くこと」「怒鳴ること」はいずれも不適切な行為であり、不適切な行為は徐々にエスカレートしていくことから「怒鳴ること」についても指導と支援が必要であることを健診従事者に伝えていく必要性を感じた。

E. 結論

ガイドブックを用いた研修は「不適切な行為を止める」という対応の理解につながったが、「叩くこと」と「怒鳴ること」を比べた場合、「怒鳴ること」への許容がみられ

たので、「怒鳴ること」の指導と支援についても周知していく必要性を感じた。

F. 健康危険情報

該当なし

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む。）

1. 特許取得：なし
2. 実用新案登録：なし
3. その他：なし

I. 問題点と利点

特記すべきことなし

J. 今後の展開

本年度の研修の結果を踏まえて、次年度は試行版のガイドブックを改訂し、市町村の現任者研修プログラムとともに提供することを予定している。

表 4. 「感情的に叩いた」との訴えがあった時の従事者の反応の変化

研修前（「7.その他」を選択）	研修後	職種	経験年数	勤務形態
状況を聞く	叩くことはいけないと伝える	保健師	8年3か月	常勤
共感するが、叩くことは肯定しない	叩くことはいけないと伝える	保健師	7年4か月	非常勤
共感するが、叩くことへの指導はできない	叩くことはいけないと伝える	保健師	7年	常勤
共感し、子どもの様子を観察	叩くことはいけないと伝える	保健師	0年	非常勤
状況を聞く	叩くことはいけないと伝える	看護師	4年4か月	常勤
共感し、あざができるほど叩かないよう助言する	叩いてはいけないと伝える	保健師	13年4か月	常勤
共感し、叩くことはいけないと伝える	叩くことはいけないと伝える	保健師	1年4か月	非常勤
状況を聞き、共感する	叩くことはいけないと伝える	保健師	10年4か月	常勤
共感するが、叩くことは肯定しない	叩くことはいけないと伝える	栄養士	21年3か月	常勤
状況を聞き、共感したうえで、叩くことはいけないと伝える	叩くことはいけないと伝える	保健師	18年6か月	常勤
状況を確認し、共感するが、叩くことはいけないと伝える	叩くことはいけないと伝える	保健師	20年6か月	常勤
状況を聞いたうえで、叩くことはいけないと伝える	叩くことはいけないと伝える	保健師	24年	常勤
状況を聞き、対応を考える	状況を聞き、共感したうえで叩く行為はいけないと伝え、支援につなげる	保健師	22年4か月	常勤
状況を聞く	共感したうえで、叩くことはいけないと伝える	保健師	24年5か月	常勤
共感し、その状況は心配と伝え、支援につなげる	共感し、叩くことはいけないと伝える	管理栄養士	22年6か月	常勤
状況を聞き、共感と対応を考える	状況を聞き、叩くことはいけないと伝え、支援につなげる	保健師	2年5か月	非常勤
叩く以外の方法を提案する	状況を聞き、叩いてはいけないと伝える	歯科衛生士	14年4か月	非常勤
叩くことは肯定せず、状況を聞き、対応を考える	状況を聞き、共感したうえで叩く行為を否定する	保健師	10年6か月	常勤
いろいろな思いを聞き、叩くことは意味がないと伝え、支援につなげる	共感するが、叩くことはプラスにならないと伝え、対応を助言する	保育士	3か月	常勤
状況を聞き、共感したうえで、対応を助言する	叩くことの悪影響を伝え、状況確認し、他の方法を提案する	保健師	1年4か月	常勤
状況を聞く	状況を聞き、叩くことの弊害を伝え、支援につなげる	保健師	17年4か月	常勤
共感し、対応について一緒に考える	共感し、状況を確認した後、叩くことは効果がないと伝える	保健師	9年4か月	常勤

共感し、状況を確認する	あざができるほど叩かないよう助言したうえで、叩くことはいけないと伝える	保健師	24年5か月	常勤
状況を聞き、対応を一緒に考える	状況は聞き、叩かないようにしたいが、叩くことはいけなしとは言えない	助産師	0年4か月	非常勤
状況を聞き、保健師に対応してもらおう	叩くことはいけなしと伝えたいが自信はない	看護師	0年	非常勤
叩くことはいけなしと伝えたいが、自信はない	叩くことはいけなしとやんわり伝える	保健師	4か月	常勤
状況を聞く	共感しつつ、状況を確認して、対応を助言する	保健師	10年	常勤
状況を聞く	子育ての大変さに共感する	保健師	3年6か月	常勤
状況を聞く	子育ての大変さに共感する	助産師	9年4か月	常勤
状況は聞くが、助言はしない	子育ての大変さに共感する	保健師	7か月	常勤
共感し、叩くことはいけなしと伝える	子育ての大変さに共感する	保健師	0年	常勤
傾聴し状況を把握。関係機関へ通告する	共感したうえで、関係機関へ通告する	保育士	3か月	非常勤
状況を聞き、対応を助言し、カンファレンスで共有する	状況を聞き、カンファレンスで対応を検討する	保健師	5年5か月	常勤
状況を聞く	状況を聞く	保健師	7年4か月	常勤

表5. 「感情的に怒鳴った」との訴えがあった時の従事者の反応の変化

研修前（「7.その他」を選択）	研修後	職種	経験年数	勤務形態
共感し、子どもの様子を観察する	怒鳴ることはいけなしと伝える	保健師	0年	非常勤
傾聴し、状況を聞く	怒鳴ることはいけなしと伝える	看護師	4年4か月	常勤
状況を聞き、共感し、怒鳴ることはいけなしと伝える	怒鳴ることはいけなしと伝える	保健師	18年6か月	常勤
状況を聞き、対応を一緒に考える	共感し、状況を聞いたうえで、怒鳴ることはいけなしとはっきり伝え、対応を一緒に考える	保育士	3か月	常勤
状況を聞いて、共感と対応を考える	状況を聞き、怒鳴ることはいけなしと伝え、支援につなげる	保健師	2年5か月	非常勤
状況を聞き、対応を考える	状況を聞いたうえで、怒鳴ってはいけなしと伝え、支援につなげる	保健師	22年4か月	常勤
状況を聞き、だめというか共感するかの対応	共感し、怒鳴ることはいけなしと伝える	保健師	4か月	常勤
相談後、保健師に伝える	状況を聞き、怒鳴ることがよくないと伝える	歯科衛生士	14年4か月	非常勤
怒鳴ることは肯定せず、状況を聞き対応を考える	状況を聞いたうえで、怒鳴る行為を否定する	保健師	10年6か月	常勤
状況を聞き、共感し、対応を助言する	状況を聞き、怒鳴ることの悪影響を伝え、他の対応を提案する	保健師	1年4か月	常勤

共感し、状況を聞く	脅えるほど怒鳴らないよう助言したうえで、感情的に怒鳴ってはいけないと伝える	保健師	24年5か月	常勤
共感し、状況を聞いたうえで、保健師に対応してもらう	怒鳴ってはいけないと伝えたいができるかは不安	看護師	0年	非常勤
共感する	脅えるほど怒鳴らないようにと助言する	栄養士	21年3か月	常勤
状況を聞いたうえで、怒鳴ることはいけないと伝える	脅えるほど怒鳴らないよう助言する	保健師	24年	常勤
共感し、対応について一緒に考える	共感し、対応を助言する	保健師	9年4か月	常勤
状況を聞く	状況を聞き、対応を助言する	保健師	不明	常勤
状況を聞く	状況を聞き、対応を一緒に考える	保健師	10年	常勤
二次的な質問をする	状況を聞き、対応を助言する	保健師	17年4か月	常勤
状況を聞く	子育ての大変さを共感する	保健師	8年3か月	常勤
共感し、脅えるほど怒鳴らないことと助言する	子育ての大変さを共感する	保健師	13年4か月	常勤
状況を聞き、共感する	子育ての大変さを共感する	保健師	10年4か月	常勤
状況を聞く	子育ての大変さを共感する	保健師	3年6か月	常勤
状況を聞き、対応を考える	子育ての大変さを共感する	保健師	20年6か月	常勤
状況を聞く	子育ての大変さを共感する	助産師	9年4か月	常勤
状況を聞き、対応を助言し、カンファレンスで共有する	状況を聞き、カンファレンスで対応を検討する	保健師	5年5か月	常勤
傾聴する	状況を聞いた後、関係機関へ通告する	保育士	3か月	非常勤
状況を聞く	状況を聞く	保健師	15年	常勤
状況を聞く	状況を聞く	保健師	24年5か月	常勤
状況を聞く	状況を聞く	保健師	7年4か月	常勤
状況を聞き、対応を考えてもらう	状況によっては仕方がないと思う	助産師	4か月	非常勤